

〔書籍紹介〕

九里順子著『詩の外包』

千葉 幸一郎

本書は九里順子氏による初のエッセイ集であり、俳句誌『鬣（たてがみ）』を中心とするメディアに寄稿したエッセイをまとめたものである。九里氏には『明治詩史論 透谷・羽衣・敏を視座として』（和泉書院、二〇〇六）、『室生犀星の詩法』（翰林書房、二〇一三）、『詩人・木下夕爾』（翰林書房、二〇二〇）という三冊のすぐれた研究書があるが、本書には「研究という文体では書けなかったものを収めた」（二五四頁）と言う。また、著者は『鬣』の同人として『静物』（邑書林、二〇一三）『風景』（邑書林、二〇一六）という二冊の句集をもつ俳人でもある。

本書は大きく三つの章に分かれている。まず「I モダンの街角」には、『鬣』五三号（二〇一四・一一）から八〇号（二〇二一・八）まで続けて掲載された二十八本のエッセイが収められている。ピンク映画の考察（五三号）から始まり、日活ロマンポルノ（五四号）、東映ポルノ（五五号）とピンク映画の話が続いたかと思えば、釜ヶ崎を舞台にした映画「秘色情めす市場」と釜ヶ崎の

詩人・東淵修との類似性に言及して（六二二号）著者の専門分野へ近づく。そして、ムード歌謡（五六号）、川内康範（五九号）、大西ユカリと小野十三郎（六〇号）：歌謡曲、詩、そして絵画、菓子、相撲……と著者の筆は軽やかに舞う。「文学は、私の固有性をあなたの固有性に向けて開き、あの日あの時の風景を共有したいと思う時に生まれる」ものであり、「そのようなあの日の風景を、思いつくままに描いたもの」（二五三頁）が本章に収められたエッセイであると著者は書く。「あの日の風景を、思いつくままに描いた」とは言うものの、収録にあたって綿密な構成員意識が働いていることが掲載誌の号数を見ると分かる。著者には「風景を、思いつくままに描く」俳人としての洞察力・瞬発力と、綿密に論を組み立てていく研究者としての構成力・持久力が絶妙なバランスで同居しているのである。

続いて「II 詩の外包」には、問題のもとに『鬣』の六七号から七八号まで連載された十二本のエッセイが並ぶ。著者は「詩は、外なるものに包まれ、外なるものを包み込んで成立している。両者が固有の地点でバランスを保って表出されたものが一つの作品であり、それぞれの作品なのである」（二五四頁）と書く。前章と違い、こちらは著者の専門とする室生犀星を中心とした近現代詩に関する考察が中心となる。ただし、著者は「専門領

域というものに拘らず、詩が連れ出してくれる問題意識を素直に追いかけ」（同頁）、その筆は『万葉集』や『文選』といった古典から、堀辰雄や石坂洋次郎ら近現代の作家、そして昭和歌謡にまで及ぶ。やはり、研究者としての冷徹な知性と、俳人としての瑞々しい感性とが同居した、すぐれた文章である。

そして「Ⅲ 見えてくるもの」には、『鬣』以外の雑誌に掲載された四つの文章が収められている。庄野潤三の小説『夕べの雲』、詩人・木下夕爾、狛犬、故郷・越前大野の谷など、ここにも著者の興味関心の広さ、学識の深さが見られる。

ところで、本書が故郷・越前大野についてのエッセイで終わるのは、本稿の筆者にとって非常に興味深い。著者は故郷の現状について次のように語る。

（前略）大野の街も、往年の賑わいはない。実家のある七間商店街は、亀山城を仰ぐ目抜き通りであったが、あの家もこの家も後継がおらずに廃業した。（中略）かと言って、往年の商店街に代わる新しい中心地ができた訳ではない。手元にある『岩波写真文庫 福井県——新風土記——1957』では、大野市の人口は四万四千とある。この夏帰省して「大野市報」を観たら、表紙に掲載されていた人口は三万一千人である。この六十年間で、四分の一

の人口が減少したのである。（二四九頁）

著者は、生まれ育った中心街の衰微や故郷の人口減少を嘆く。その気持ちは、奥州白石の中心街に生まれて二十四歳まで育った本稿の筆者にも痛いほど分かる。白石も一九五五年の段階では人口が四万五千人ほどだったが、二〇二二年六月末の段階では三万二千人となっており、越前大野と同様の推移を見ている。

日本海側と太平洋側との違いから積雪量に差はあれど、越前大野も奥州白石も盆地の中に位置する城下町である。夏は酷暑、冬は極寒という気候であり、平山城のもとに城下町が整備され、掘割を清らかな水が流れる。亀山城（大野城）の麓にある柳廻社（幕末の大野藩主、土井利忠を祀る）の風景が著者の「幼少期の原風景」（二二二頁）だそうだが、本稿の筆者にとっては白石城の建つ益岡に鎮座する神明社（片倉小十郎を祀る）がそれに当たる。似たような原風景をもち、同じように城下町の目抜き通りに生まれ育ったところから、著者の感性には自分と相通ずるものを感じるのである。

九里順子先生は二〇二二年三月をもって本学をご退職になり、故郷の越前大野に戻られた。ご実家の事情ということで致し方ないことは言え、二〇二一年四月に着任した本稿の筆者が同僚としてご一緒できたのは一年にも満たない短い期間であり、本当に残念である。先に書

いたように、盆地の中の城下町に生を受けて幼少期を過ごした者同士、文学や歌謡曲についていろいろ語り合いたかったし（ピンク映画はちよつと……）、コロナ禍の状況でなければカラオケで一緒に一九七〇年代の歌謡曲を歌いたかった（ちなみに言うと、本稿の筆者は一九七二年の早生まれである）。

末筆ながら九里先生の学恩に感謝し、今後のご健康とご多幸をお祈りする次第である。

（二〇二二年二月一〇日 翰林書房刊）